

平成 28 年度 JACET 中国・四国支部

春季研究大会プログラム&発表要旨

日時：6月4日（土）13:00 ～ 受付

場所：愛媛大学（〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番）

13:00 ～ 受付

13:30 ～ 13:50 支部総会（教育学部103講義室）

司会 三宅 美鈴（広島国際大学）

13:50 ～ 13:55 開会式

開会の辞

支部長 松岡博信（安田女子大学）

大会実行委員長 池野 修（愛媛大学）

（休憩 5分）

14:00 ～ 17:45 研究発表

第1室（教育学部101講義室）

司会：岩井 千秋（広島市立大学）

発表1：Recent Research and the Benefits of Bilingualism

（14:00－14:25）

Laurence Dante（就実大学）

発表2：Differentiating instruction through thinking routines

（14:30－14:55）

Magee Glenn Amon（愛媛大学）

（休憩：14:55－15:05）

司会：高橋 俊章（山口大学）

発表3：小学校における英語音声指導に関する実態調査：中学・高校教員との比較から

（15:05－15:30）

三宅 美鈴（広島国際大学）

発表4：アクティブ・ラーニングで学ぶ英語教育学専門科目の授業実践

－TBL（チーム基盤型学習）を取り入れた授業が学修意欲に与える影響－

（15:35－16:00）

関谷 弘毅（広島女学院大学）

発表5：大学英語クラスにおける口頭リハーサルとスピーチの実践

（16:05－16:30）

長崎 睦子（愛媛大学）

折本 素（愛媛大学）

第2室（教育学部102講義室）

司会：松岡 博信（安田女子大学）

発表1：複数形態素“-s”に関するエラーと言語的差異の意識化の必要性

(14:00-14:25)

西谷工平（就実大学）

中崎 晃（就実大学）

発表2：日本人英語学習者が習得すべき語彙サイズについての考察

(14:30-14:55)

山本五郎（広島大学）

（休憩：14:55-15:05）

司会：寺嶋 健史（松山大学）

発表3：Nathaniel Hawthorne の Dr. Heidegger's Experiment における話の展開と文体論的特徴

(15:05-15:30)

藤居 真路（広島県立尾道商業高等学校）

発表4：ロアルド・ダールの Matilda における言語表現とユーモアについて

(15:35-16:00)

田淵 博文（就実大学）

（休憩：16:30-16:40）

パネルディスカッション：「愛媛大学における先進的な英語教育の取り組み」

（教育学部 103 講義室）（16:40-17:40）

（1）「Sharing the experience of teaching Super Global High School students」

パネラー1：Akira Nakayama（愛媛大学英語教育センター）

パネラー2：Julia Kawamoto（愛媛大学英語教育センター）

パネラー3 Magee Glenn（愛媛大学英語教育センター）

（2）「Pilot Study of the P-AP Program at Ehime University」

パネラー4：Christopher Connelly（愛媛大学英語教育センター）

パネラー5：Wei Zhou（愛媛大学英語教育センター）

17:40 - 17:45 閉会式

開会の辞

副支部長 岩井千秋（広島市立大学）

懇親会 場所：ノギス（NPGOSU）<http://www.hotpepper.jp/strJ001100764/>

（大学より徒歩10分）

時間：18:10 ~ 20:00

費用：4,000円（飲み放題）

研究発表 要旨

第1室

発表1 : Recent Research and the Benefits of Bilingualism

発表者 : Laurence Dante (就実大学)

Until the 1960s, bilingualism had often been criticized and was thought to generally have negative effects on bilingual individuals. However, beginning with Peal and Lambert's (1962) research, bilingualism began to be more favorably accepted and supported. Currently, researchers from many different fields study various aspects of bilingualism in a more progressively eclectic manner. The main focus of this presentation is to reveal some recent research findings regarding bilingualism, with a special emphasis on the benefits of this phenomenon. However, certain concerns regarding recent research and perceptions will also be discussed.

発表2 : Differentiating instruction through thinking routines

発表者 : Magee Glenn Amon (愛媛大学英語教育センター)

This case study aims to highlight how two thinking routines: Think-Pair-Share, and See-Think-Wonder (Ritchhart, Church, and Morrison, 2011) can be incorporated in teaching to promote student independence, creativity, and collaboration. While studies on the role of metacognition have focused on strategy and learning styles (Oxford, 1990) there has been a lack of discussion on how these can be used with classes of students of mixed abilities and thinking dispositions, required to work collaboratively. Research on differentiated classrooms (Tomlinson, 2014) highlights that not all learners use identical strategies or thought processes when learning. Therefore, an ongoing challenge for classroom teachers is to consider how to balance curriculum requirements with actual student needs. Models of thinking and learning are particularly significant in this respect as they demonstrate language learning is much more than the delivery of content, especially, in the form of useful words and phrases. One hundred and twenty freshmen university students engaged in the use of both routines as part of their regular studies to determine the effectiveness and applicability of the routines for English as a foreign language (EFL) classrooms. Students uploaded a fifty-word report twice a week, and six questions or phrases related to the topic. The effectiveness of the routines, and implications for future research, are considered against student submissions to the university's online Moodle course.

発表3 : 小学校における英語音声指導に関する実態調査—中学・高校教員との比較から

発表者 : 三宅 美鈴 (広島国際大学)

小学校での英語活動は、コミュニケーション能力育成という大義の下、音声中心で行われていることは周知のことである。しかしながら、実際には小学校教師の音声に関する基本的専門知識の欠如と自身の英語発音への自信のなさ、そして発音指導に自信が持てないという理由から、英語

活動では音声に関する指導が十分には行われていない状態である(三宅他、2016)。本研究では、これらの小学校教員の実態調査結果と、中学校と高等学校の教員への音声に関するアンケート調査結果とのクロス分析を行い、小学校教員の英語発音指導の特徴および長期的観点からの小学校における英語音声教育の在り方を探った。その結果、中学・高校でも比較的指導が難しいと感じる項目である「母音」や「子音」は小学校の頃から意識して発音させることに意義があること、また小学校では、英語音声についての基礎的知識がある教員でも生徒の発音の矯正の必要性の判断には自信が持てないが、中学・高校教員では自信を持っていることなどがわかった。小学校教員に対しては、知識だけでなく実践的矯正の方法などを学ぶ必要性を示唆している。その他詳細は当日発表したい。

発表4：アクティブ・ラーニングで学ぶ英語教育学専門科目の授業実践

－TBL(チーム基盤型学習)を取り入れた授業が学修意欲に与える影響－

発表者：関本 弘毅 (広島女学院大学)

1. 問題と目的

教育再生実行会議(2015)による第七次提言において、「小・中・高等学校から大学までを通じて、課題解決に向けた主体的・協働的で、能動的な学び(アクティブ・ラーニング)へと授業を革新」することが求められている。本研究の目的は、大学の英語教育学専門科目、「第二言語習得研究」における、アクティブ・ラーニングの一形態であるTBL(チーム基盤型学習)を取り入れた授業が学修意欲に与える影響を検証することがである。

2. 方法

TBLを取り入れた授業と、講義スタイルの授業の学修効果を比較検討する。TBLを取り入れた授業とは、具体的には、0)テキストの指定された箇所を読んでくる(予習)、1)四者択一の問題に個人で取り組む、2)4～5人のチームで同様の四者択一の問題に取り組み、チームの答案を決定する、3)各チームが答案を発表し、他チームと答案が異なる場合正答を巡って議論する、4)教員が正答を伝え補足説明する、5)次の授業で行われる語句説明の記述式問題に備える(復習)という手順で行われた。

3. 結果・考察

TBLを取り入れた授業のほうが高い出席率を示した。質問紙調査による別角度からの意欲の測定及び分析は現在準備中で、本発表当日までには報告が可能となる予定である。

発表5：大学英語クラスにおける口頭リハーサルとスピーチの実践

発表者：長崎 睦子 (愛媛大学)

折本 素 (愛媛大学)

本研究は、グローバル化に対応した大学生の英語コミュニケーション能力育成のために、特に共通教育初年次において、その基盤となる基本的スピーキング力を身につけさせる指導法とその効果を測定する評価法を確立することを目的としている。これらを中心に、次の3つプロジェクトを行っている。(1)授業と授業外学習を有機的に結び付けた英語スピーキング能力を育成する指導方法の実践と改善、(2)スピーキング能力の評価ルーブリックの作成と実施、及び、その妥当性・信頼性の向上、(3)普遍的なスピーキング指導法の発展に向け、授業期間が異なる複数のクラスでの実践。授業ではスピーチ(成果発表)を定期的に行い、授業外ではそのスピーチに

向け口頭でリハーサル（練習）をする「スピーチ&リハーサル」法を用い、リハーサルは日本人大学生の英語の意味や形式に対する気づきを高め、さらにスピーキング力を向上させるかどうかを検証している。ひとりのできるリハーサルは、日本にしながら学習者の英語スピーキング量を大幅に増やす方策として期待できる。これまで、大学1年生を対象にした必修英語科目のクラスにスピーチ&リハーサル法を取り入れ、その効果を検証する調査を2年間実施した。さらにスピーキングの評価方法を改善した上で、現在、3年目の研究に取り組んでいる。今回の発表では、スピーチ&リハーサル法について紹介し、これまでの調査の主な成果を報告する。

第2室

発表1：複数形態素“-s”に関連するエラーと言語的差異の意識化の必要性

発表者：西谷工平（就実大学）

中崎 崇（就実大学）

本研究の目的は、複数形態素“-s”に関連するエラー分析を通して、外国語学習における言語的差異の意識化の必要性を明確にすることにある。所属機関の外国人教員によると、大学生がライティングの授業で記述した英語の中には、たとえば“*This has five button ...*”や“*I would wear this sandals ...*”のような、複数形態素“-s”に関連するエラーが頻繁に見受けられるという。これは、「できた」（中?・他, 2016）や「と思う」（西谷・他, 2015）の英語翻訳におけるエラーに比べれば、初歩的で些末とみなされるかもしれないが、実は根深い問題を孕む。というのも、可算名詞の「単数／複数」は五感（とくに視覚）に直結するという点で学習も指導も平易であるはずなのに、上述のようなエラーが終息する気配が一向に見られないからである。別角度から見ると、これは英語の「単数／複数（-s）」を指導するだけでは、エラー予防として不十分だという可能性を示唆する。複数の可算名詞について、日本語と英語で文法形式化に差異があることを意識させ、既存の「単数／複数」に関連する知識を再構築させることが、当該のエラーを予防するひとつの手立てとなる（cf. 今井・他, 2012）。このケースと上掲の発表者の諸研究とを併せて、外国語学習における言語的差異の意識化の必要性を論じる。

発表2：日本人英語学習者が習得すべき語彙サイズについての考察

発表者：山本五郎（広島大学）

日本の英語教育は実践的なコミュニケーション能力の養成に重きを置いてきた。現行の学習指導要領では、「与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること」が学習目標に加えられるとともに、教材についても「聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力を総合的に育成するため、実際の言語の使用場面や言語の働きに十分配慮したものを取り上げるものとする」と記されている。また義務教育以降の英語教育でも、スーパーグローバル大学等の事業が展開されているとともに、4技能を測定可能な外部検定試験の活用なども推進されており、所謂オーラルコミュニケーション力の養成が求められる傾向は非常に顕著である。このような背景を踏まえて、今回の発表では話し言葉コーパスを用いて英語のオーラルコミュニケーションで高頻度に使用される語彙リストを作成し、これを文部科学省検定教科書の語彙リストと比較することで、実際の話し言葉で高頻度に用いられる語群を明らかにする。本発表は、中学校での基本語彙500語レベルの語彙リストの比較分析を行った2015年度の発表の後続研究であり、

中学校・高等学校での学習目標の目安となっている 3000 語レベルの語彙リストを比較分析したものである。特に学習対象として話し言葉語彙リストを活用する際の課題に焦点を当て、日本人英語学習者が習得すべき実践的な語彙力および語彙サイズについて考察する。

発表 3 : Nathaniel Hawthorne の Dr. Heidegger's Experiment における話の展開と文体論的特徴

発表者：藤居真路（広島県立尾道商業高等学校）

今日初等・中等教育において、学びの変革が目指され、企業が人材を採用する際の能力や資質を指標としたコンピテンシーを高めるために、アクティブ・ラーニングを行うことが目指されるようになってきている。こうした時代において、海外の小説を読んで、人生の意義や青年期の過ごし方について深く考えさせる意味は大きいと考えている。本研究では、昨年度 Nathaniel Hawthorne の The birthmark をついて代名詞の出現と話の展開との関係を探求したことを基にして、Nathaniel Hawthorne の Dr. Heidegger's Experiment を取り上げ、代名詞の出現と話の展開との関係を考えていきたい。なお、この作品を取り上げた理由は、青年期の過ごし方について考えさせる作品であり、中等教育・高等教育において読ませたい作品の 1 つであるからである。本研究では、話の展開をよりよく理解できるように、代名詞に新たな要素を加えて、段落の構造の特徴と話の展開との関係について明らかにしていきたい。また、話の展開に存在するフレームとそのフレーム内の構造を文体論的に探求し、本作品の特徴を明らかにしていきたい。さらに、段落間の関係について、その関係を文体論的に決定する方法についても探求していきたい。さらにまた、こうした探求を通して、この作品が、今日の若者に問いかけていることについても考えていきたい。

発表 4 : ロアルド・ダールの Matilda における言語表現とユーモアについて

発表者：田淵博文（就実大学）

ロアルド・ダールは短編の名手であると同時に世界的に有名な児童文学者でもある。ロアルド・ダールの児童文学書である Matilda を読むと、確かに Matilda が主役であるが、彼女の適役である Miss Trunchbull 校長の存在も無視できないほど大切である。なぜならば彼女の発する言葉が過激で大きな表現が多く、また彼女の行動も突飛で、まるで彼女が劇画の主人公のように滑稽に描かれているからである。本発表では、Matilda から、Miss Trunchbull 校長の発する言語表現（主に誇張表現）を抜き出し、読者に笑いを起こさせているユーモアがどこから生まれてくるのかを探っていきたいと思う。

パネルディスカッション：「愛媛大学における先進的な英語教育の取り組み」

(1) 「Sharing the experience of teaching Super Global High School students」

パネラー 1 : Akira Nakayama (愛媛大学英語教育センター)

パネラー 2 : Julia Kawamoto (愛媛大学英語教育センター)

パネラー 3 : Magee Glenn (愛媛大学英語教育センター)

This preliminary report shares the experiences of teachers involved in two collaborative projects between Ehime University and the Matsuyama Higashi Super Global High School. Last year we introduced first grade senior high school students (n=22) to the topic of global communication skills over a period of 13

weeks, and culminated in student-led poster presentations. This year our new course, the Collaborative Research Project, introduces second grade senior high school students (n=8) to current theory and practice in language learning with a view to competency development in independence, collaboration, and creativity. Specific emphasis is placed on fostering student engagement with ideas, and represents a fundamental shift from learning that is focused on the transmission of information. Thus, thinking is placed at the center of the learning experience and not as a consequence of the classes. Both projects seek to extend the definition of the word global for learners and to offer opportunities to reflect on the nature of language learning.

(2) 「Pilot Study of the P-AP Program at Ehime University」

パネラー 4 : Christopher Connelly (愛媛大学英語教育センター)

パネラー 5 : Wei Zhou (愛媛大学英語教育センター)

The P-AP program is an outreach program offering local high school students the opportunity to engage in first-year university level English lessons with a focus on globalization. By emphasizing the importance of communicative ability through the use of pair and group discussion, students are able to boost their confidence in using English and gain invaluable experience cooperating with students from other schools and with the foreign lecturers at Ehime University. Questionnaires distributed at the start of a pilot course conducted during the second semester of the 2015/16 academic year showed that the students had high levels of anxiety regarding use of English in front of classmates and low levels of self-confidence in spoken English ability; however, on a positive note, the majority showed high levels of motivation and excitement about the chance to participate in such a course. Additionally, responses suggested that the students were enthusiastic about the immersive style of the P-AP lessons compared with the more grammar based translation style lessons conducted mostly in Japanese in their regular high schools. The course was conducted entirely in English, which was one of the most praised aspects. Questionnaires distributed at the end of the course showed a marked increase in confidence in using English.